



審査員特別賞

メダカに住む水田

宮城県仙台市立寺岡中学校二年

色川 智香

私がメダカの住む水路に囲まれた水田と出会ったのは、小学四年の夏でした。農家である祖母の実家を家族で訪ねた際に、父のいとこのおじさんが連れて行ってくれました。私はそれまで、メダカは沼や池にだけいるものと思っていました。青々とした田に挟まれた小さな水路の中を群れをなして右に左にスイスイ泳いでいる様子を見て、仙台駅からわずか四十分程の場所に、このような自然が残っていることに、私は驚き興奮しました。

祖母の実家は、仙台市蒲生海岸近くの水田地帯の一角にありましたが、この一帯には、他にもたくさん生物が生息していました。春には川からかんがい用の水を引き込む際にコイが入ってきたり、夏にはザリガニやメダカが居たり、秋には稲の実った田にイナゴが飛んでいました。そして、冬には水田わきのあぜ道や畑に積み重ねたわらの中にカブトムシの幼虫が生息していたり、といった具合です。そこは、四季折々の豊かな自然に恵まれた、私のお気に入りの場所でした。

小学四年の秋、稲刈りの季節に訪れた時には、父のいとこが私と弟をコンバインに乗せて稲刈り体験させてくれました。その時に水路で泳いでいるメダカを網ですくって自宅に持ち帰り、水槽で育てることにしました。後で調べたところ、このメダカは日本の水路から一時消えてしまったとされる天然記念物のクロメダカかもしれないという驚くべきことがわかりました。日本のメダカは、農薬の使用により数が激減したと言われています。用水路にメダカがいるということは、農家の人たちが農薬の使用を最小限にするなど、自然を守る工夫をしているからだ

思いました。私はこれまで祖母の実家からいただいたお米を毎日食べてきましたが、このようにきれいで安全な水で育てられていたことを知り、とてもうれしく思いました。また、お米を作った人達に対して感謝の気持ちが生まりました。

今年の三月十一日に東日本大震災が起きました。海岸からわずか二キロしか離れていなかった祖母の実家は津波にのみこまれて跡形もなく流されてしまいました。

震災から一月ほどたった日に、私は祖母の実家のあった場所を訪れました。そこで私が見た景色は、大好きな水田の広がる風景ではなかったのです。悪臭のするヘドロが積もった中にたくさんの車やガレキが散在した無残な田んぼの姿でした。用水路と思われる場所は、これまで見たこともない黄土色によどんでおり、私はとても悲しい気持ちで帰ってきました。

お盆のお墓参りに訪れた八月になっても、その場所の風景はあまり変わっていませんでした。用水路も干からびたままでした。しかし、表面が白っぽく、塩で残っていると思われる田んぼにたくさんの雑草がたくましく生えているのを見つけました。どこから種が飛んできたのか、所々にヒマワリも咲いていました。砂漠のようになった土地に生えた雑草の緑を見つけて、私は少しほっとした気持ちになりました。しかし雑草の緑は農家の人達が一生懸命手を加えて作ってきた稲の緑ほど美しいと感じる緑ではありませんでした。私にとって緑の田んぼは見るだけで落ち着いた気持ちになれる、心に安らぎを与えてくれる場所でした。今回の震災をきっかけに、大自然と人間の営みの調和が作り出した美しい緑の重みと素晴らしさを私は改めて知りました。

八月十六日の朝刊の一面に、蒲生干潟とそこに住む生物たちが回復してきたという記事が載っていました。私は、干潟に生息する小さな生物たちの生命力や自然の回復力に驚き感動しました。そして、いつかまたメダカが住む美しい田んぼが、ここに戻ってくるかもしれないという希望が湧いてきてうれしい気持ちになりました。